

Title	批判社会学とその規範性の問題： 構築主義以後の社会学における規範性への関心の高まりを考えるために
Sub Title	Critical sociology and its issue of normativity : essay on the increasing interest in normativity after constructionist sociology
Author	小田切, 祐詞(Odagiri, Yuji)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.76 (2013.) ,p.43- 59
JaLC DOI	
Abstract	This paper examines the transition from critical sociology to the sociology of critique and its synthesis in contemporary French sociology according to two overall goals. First, to understand what has caused the increasing interest in its normativity after constructionist sociology, this paper focuses on Pierre Bourdieu's sociology as an example of constructionist sociology and explores it from the perspective of Luc Boltanski. According to Boltanski, Bourdieu's critical sociology devotes itself to unmasking and criticizing unequal structures and the power relations on which these structures are based, without explicitly constructing a normative basis to justify its critique. Such ambiguity regarding its normativity prevents critical sociology from contributing to its emancipation. In addition, this lack of emancipatory potential is considered as one of the factors that direct sociology after constructionism toward its normativity. Second, this paper discusses what attitude should be taken toward the tendency in which sociology after constructionism thematizes normativity. Boltanski's transition from the sociology of critique to the synthesis between critical sociology and the sociology of critique shows that normative sociology includes less critical potentialities than constructionist sociology. Based on the findings, this paper proposes that sociology should attempt to synthesize constructionism and normative sociology, which is in contrast to Manabu Akagawa, who believes in constructionist sociology, and Kazuo Seiyama, who completely abandons constructivist sociology and insists on the need for sociology as a normative inquiry into the community.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000076-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批判社会学とその規範性の問題

——構築主義以後の社会学における規範性への関心の高まりを考えるために——

Critical Sociology and Its Issue of Normativity

——Essay on the Increasing Interest in Normativity after Constructionist Sociology——

小 田 切 祐 詞*

Yuji Odagiri

This paper examines the transition from critical sociology to the sociology of critique and its synthesis in contemporary French sociology according to two overall goals. First, to understand what has caused the increasing interest in its normativity after constructionist sociology, this paper focuses on Pierre Bourdieu's sociology as an example of constructionist sociology and explores it from the perspective of Luc Boltanski. According to Boltanski, Bourdieu's critical sociology devotes itself to unmasking and criticizing unequal structures and the power relations on which these structures are based, without explicitly constructing a normative basis to justify its critique. Such ambiguity regarding its normativity prevents critical sociology from contributing to its emancipation. In addition, this lack of emancipatory potential is considered as one of the factors that direct sociology after constructionism toward its normativity. Second, this paper discusses what attitude should be taken toward the tendency in which sociology after constructionism thematizes normativity. Boltanski's transition from the sociology of critique to the synthesis between critical sociology and the sociology of critique shows that normative sociology includes less critical potentialities than constructionist sociology. Based on the findings, this paper proposes that sociology should attempt to synthesize constructionism and normative sociology, which is in contrast to Manabu Akagawa, who believes in constructionist sociology, and Kazuo Seiyama, who completely abandons constructivist sociology and insists on the need for sociology as a normative inquiry into the community.

Key words: critical sociology, sociology of critique, Bourdieu, Boltanski, critique

キーワード: 批判社会学, 批判の社会学, ブルデュー, ボルトンスキー, 批判

1. 問題の所在

1.1 本論文の目的とその背景

本論文は二つの目的をもっている。一つ目は、「構築主義以後の社会学における規範性への関心の高

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程3年

まり」という傾向に伏在する論理の一端を明らかにすること。もう一つは、この傾向に対する今後の研究の方向性を提示することである。ピエール・ブルデュー以後のフランス社会学説史の検討を通じて、これら二つの目的を達成することが、本論文の大まかな流れである。

本節では、このような目的を設定するに至った背景を論じたい。それは、赤川学と盛山和夫との対立である。両者の関係性は次のように要約できる。両者とも、構築主義を素朴实在論の否定という認識論から捉えると同時に、構築主義以後規範性に関心が高まっていることも認めている。しかし、赤川は、構築主義を、研究対象や研究対象者に対する社会学者の内在性を強調するアプローチとして捉えている。そして、構築主義以後、規範性が問題となっていることを認めながらも、その風潮に与せず、構築主義のパラダイムに留まることを選択する。それに対して、盛山は、構築主義を、研究対象や研究対象者に対する社会学者の外在性を強調するアプローチとして理解する。そして、彼は、構築主義を捨て、社会学に規範性を回復する方向性を打ち出している。

詳しく見ていこう。赤川は、講義のあとにやってきた一人の学生が述べた次のような感想を述懐している。「『ジェンダーやらセクシャリティやらその他もろもろの現象が社会的に構築されていることは、納得した。ただ、現象が構築されたものであることを前提とした上で、どのように構築するのが望ましいのか教えてほしい』」（赤川 2012: 41）。赤川はこの問いを、「構築主義にまじめに向かい合えば合うほど、喉に刺さったトゲのように残り続けるもの」（赤川 2012: 41）と形容する。このように、赤川は、構築主義以後、規範的な望ましさを主題化する需要ないし必要性が高まっていることを認める。だが、赤川はその道を選択せず、あくまで構築主義のパラダイムに留まる。この場合の構築主義とは、どのような構築が望ましいのかを問うことよりもむしろ、「(望ましいはずの)構築でさえ、現実世界において実現されたり、なされなかったりするのなぜか、いかにしてかを問う」（赤川 2012: 44）、問題構築のプロセス研究を意味する。

盛山は反対の道を選ぶ。彼は、構築主義以後、規範的なものを積極的に構想する学として、社会学を再定式化することを試みている。その理路を以下見ていこう。

盛山は構築主義を「外的視点」という言葉で特徴づけている。つまり、盛山にとって構築主義とは、日常生活の外部に立つ視点を確保するための客観主義的戦略を意味するのである。

盛山がこのような発想に至った背景には、彼の独特のラベリング論の解釈がある¹⁾。盛山は、それまでの逸脱論に対するラベリング論の貢献を、逸脱現象についての素朴实在論的見方の否定に求めている。「ベッカーはマリファナ使用などの現象を取り上げて、それらが『逸脱』だとされることにはたして『客観的』な根拠があるのか、という問いを發し、結局のところ、逸脱とは社会的に定義されたもの、つまり、社会が逸脱とみなすから逸脱なのであって、『逸脱』をあたかも客観的、実体的に存在するものであるかのように考えてきたそれまでの社会学に反省をせまった」（盛山 2011: 202）。盛山によれば、このような反省は、社会学者を「世間の見方から距離をとる」（盛山 2011: 202）よう導いた。というのも、ラベリング論によって多くの社会学者は、「それまでの社会学が、自分ではきわめて客観的に分析しているものと思いきみつつ、実のところあまりにも社会で日常的に通用している価値観を『自明のこととして受け入れていること』に気づかないで研究してきたことを、反省的に捉えるように」（盛山 2011: 5-6）なり、「世間において『逸脱』とみなされていることをたんにそのままなぞっているだけの社会学理論はけっして『客観的』な理論とはいえない」（盛山 2011: 7）と考えるようになったからである。

したがって、ラベリング論が社会学に提供したのは、より確実な客観性を得るために日常的世界の外部に立つという方向性であった。この方向性の延長線上に、盛山は社会問題の構築主義を位置づける。単に研究者自身が社会問題だと思ふものを社会問題として取り上げて考察するだけでは、一日常的生活者としての偏見や根拠のない信念を投影するだけで終わってしまうかもしれない。そこで考案されたのが、当事者たちが社会問題だと定義するものを対象として取り上げて考察するというアプローチである。そうすれば、「何が社会問題であるか」の判断に社会学者自身はコミットしなくて済む。

このように理解される構築主義的アプローチに対して、盛山は大きく分けて二点疑問を投げかけている。一つ目は、社会学者および社会学は、本当に日常的世界の外部に立つことができるのか、という点(盛山 2011: 210)。もう一つは、外的視点を採用する構築主義に特徴的な、「斜めに構える」態度からなされる研究は、その相対主義的で懐疑的な性格ゆえに、日常的世界を構成している規範や慣習、価値意識などの解体に寄与するだけになってしまうのではないか、という点である(盛山 2011: 211)。

このように「社会学の客観性のシニシズムという問題」(盛山 2011: 212)に陥っている構築主義に対して盛山が提示する代案は、「共同性の学」ないし「秩序構想の学」としての社会学である。それは、内的視点に立ち、経験的調査に基づく既存の共同性の解明と望ましい共同性の理論化を通して、研究対象である社会に対して規範的に関わる学問として理解される。この場合の研究の客観性は、「仮説」から出発する、普遍的妥当性に志向した共同の討議を通じて確保される。

なぜ、既存の共同性だけでなく、望ましい共同性にも取り組まなければならないのか。その理由を、盛山は、共同性探究のはらむ次の二つの危うさに帰している。一つ目は、既存の共同体の再生や強化を考えるだけに終わってしまう危険(盛山 2011: 262)。もう一つは、既存の秩序に対して無批判になる危険である(盛山 2011: 263)。このように既存秩序の単なる肯定とならないよう、現にある共同性を問題化する視座が必要になる。それが、望ましい共同性なのである。

だが、赤川は盛山に異議を唱えている。赤川がとりわけ問題にするのは、盛山の構築主義観、すなわち、日常生活の外部に立つ視点を確保するための戦略という見方である。赤川にとって構築主義はむしろ、調査対象もしくは調査対象者にできるだけ寄り添おうとする姿勢によって特徴づけられる。「社会問題の構築主義は、それらの理論(=機能主義、マルクス主義、実証主義)が当事者の定義活動をないがしろにしてきたことへの反省の上に立って、自らの方法論を鍛えてきた(.....)。つまり構築主義の原点は、社会の成員による問題構築の過程に寄り添うこと、そして社会の成員とは独立に社会問題を定義できるとする社会学者の『奢り』を捨てることにあった」(赤川 2012: 31-32)。

社会学者は上から物を言う態度を慎まなければならない。社会の成員と社会学者との過度の非対称性を否定する赤川のこのような姿勢は、望ましい構築を問う正義論と構築主義とを対比させる段階においても現れている。「ある政策の意味づけは、正義論が上から目線で判断できるものではなく、その政策に、クレーム申し立て者らがどのような意味づけを行なったかを観察しなければならないのだ」(赤川 2012: 44)。明示的には述べられていないが、赤川が望ましい構築を問うことに対して禁欲的であるのも、彼の社会学者に求める姿勢がその背景にあると考えることができる。

以上の議論から、赤川と盛山の構築主義をめぐる立場の類似点と相違点を、次のようにまとめることができる。彼らはともに、社会問題の構築主義を、素朴実在論の否定という認識論から捉えている。また、彼らは、構築主義の限界として、近年の社会学における規範性への関心の高まりを捉えている。だが、彼らは次の二点で対立している。一つ目は、赤川が構築主義を調査対象や調査対象者に対する内在

的アプローチとして理解しているのに対し、盛山はむしろ「外的視点」という形で構築主義を特徴づけている点。もう一点目は、構築主義以後の社会学における規範性への関心の高まりに対して、赤川が構築主義の枠組みに留まるのに対し、盛山はシニシズムに陥る危険性のある構築主義を捨て、「秩序構想の学」の確立という形でこの傾向を積極的に推進していこうとしている点である。

1.2 本論文の構成

ここまで我々は、構築主義から規範社会学へという流れに対する、二人の社会学者のそれぞれの位置取りを確認してきた。本論文が提案する位置取りは、この二者とも異なる。それは、盛山のように構築主義を全面的に捨てる方途でもなければ、赤川のように規範的なものを斥ける方途でもない。この点は、冒頭でも述べた本論文の目的の二つ目に当たるものであり、本論文の立場は第4節と第5節を通じて明らかにされる。

本論文の一つ目の目的、すなわち、構築主義以後の社会学を規範性の問題に向かわせた要因を明らかにする作業は、第2節と第3節を通じて行なわれる。第2節では、ブルデュー社会学がいかなる点において構築主義的なのかを検討される。ここでは次のような手続きが取られる。最初に、ブルデュー社会学を、赤川と盛山が理解する意味での構築主義と共通の土台に載せる作業が行われる。次に、ブルデューが自らの社会学を形容する際に用いた「構造主義的構築主義」という言葉の意味内容を検討することによって、ブルデュー社会学の構築主義的側面をより明確化する作業が行われる。最後に、この検討を通して、ブルデュー社会学には、構築主義的側面だけでなく、批判的側面も存在することが確認される。このとき、我々は、ブルデュー社会学がなぜ「批判社会学」と呼ばれるのかを知る。

第3節では、リュック・ボルタンスキーがブルデューの批判社会学をどのように特徴づけていたのかを確認する。この作業を通じて、批判社会学が規範性の問題をあいまいにしていたこと、そして、そのことが批判社会学に解放にかかわる問題をもたらすことが明らかにされる。この解放の問題を、構築主義以後の社会学に規範を主題化させるに至った要因と見なすことによって、本論文の一つ目の目的が達成される。

第4節では、ボルタンスキーが批判社会学に抗する形で「批判の社会学」を構想しながらも、その後、批判社会学との総合へと舵を切ったことが確認される。ここでは、批判の社会学が批判社会学に比べて批判的潜勢力に欠けていることが明らかにされる。この批判的潜勢力の欠如の問題が、構築主義以後規範性に関心を寄せる社会学にとって、一つの陥穽となるかもしれないことが示唆される。

第5節では、批判社会学を構築主義、批判の社会学を規範社会学と見なしたとき、赤川や盛山とは異なり、ボルタンスキーのように両者の総合を目指す方向性を模索していくべきであるという結論が提示される。

2. ブルデュー社会学の構築主義的側面と批判的側面

上述の通り、第2節は、ブルデュー社会学がいかなる点で構築主義的なのかを明らかにすることを主要な目的とする。

最初に、ブルデュー社会学における認識論的前提と社会学者の位置が検討される。この作業によって、一方で、ブルデュー社会学が、素朴实在論の否定という点で、赤川や盛山の理解する構築主義と共通点をもつことが主張される。だが、他方で、社会学者の調査対象ないし調査対象者に対する外在的位

置の強調、ならびに、外在性による科学的客観性の強調という点から、ブルデュー社会学が盛山の理解する構築主義の方に類似していることも主張される。

次に、「構造主義的構築主義」と自ら称するブルデュー社会学の特徴を、とりわけ彼の教育社会学の業績に依拠しながら同定する。この作業によって、ブルデュー社会学が、構築主義的側面だけでなく、批判的側面ももつことが確認される。

2.1 構築主義的側面

2.1.1 認識論と社会学者の位置

赤川と盛山の共通基盤であった認識論的前提、すなわち、素朴実在論の否定は、ブルデューにおいても共有されている²⁾。それは、彼がソシユールの「視点が対象を作る」という言葉を引き合いに出すことによって、対象構成の視点依存性を主張するくだりに現れている (Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 76)。このように主張することによって、ブルデューは、ラザースフェルドに代表される「事実を与件として扱う実証主義」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 82) と自らの社会学を区別する³⁾。

だが、社会学は、他の科学に比べて日常知と科学の間の境界があいまいであるため、このような「社会的世界の身近さ」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 44) が、真に科学的な対象を構成するための視点的獲得を妨げる恐れがある。そこで必要となるのが「認識論的切断」である。これは、フィリップ・コルクユフの表現を借りれば、「社会学者の科学的認識と社会的行為者の『自生社会学』との切断」(Corcuff, 2006: 28) を意味する。自生社会学とは、常識や先入観から十分に切り離されないまま成立している社会学を指す。

ブルデューによれば、自生社会学は二つの前提によって支えられている。一つ目の前提は社会的なものの認識に関するものであり、それをブルデューは「透視の幻想」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 48) と名づける。これは、社会的事実を個人的な省察や内省だけで理解し、説明できるという錯覚を意味する。このような幻想に対置されるのが「非意識の原理」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 49) である。この原理は、方法論的決定論を社会学の論理の中で再定式化したものであり、社会的なものを、行為者の抱く見解によってではなく、意識から逃れる原因によって説明しようとするものである (Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 48)。

自生社会学を支えるもう一つ的前提は行為に関わるものであり、それをブルデューは「人間行為についてのヒューマニズムの哲学」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 51) と呼ぶ。これは、「人間の権利、自由に行為する権利、行為について明晰な自覚を持つ権利」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 50) を主張する、「素朴な行為哲学」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 51) を意味する。人間的自然を与件とするこのような哲学に対置されるのが、「関係の一次^フ性」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 54) の原理である。この原理に従えば、社会関係は意図や動機づけをもった諸主体間の関係に還元されない。なぜなら、社会関係はむしろ、諸主体を結びつけるさまざまな社会的条件や社会的位置の間に成立するものだからであり、意図や動機づけといった主観はこのような客観的諸関係によって決定されるからである。人間的自然という概念は、それが歴史的・社会的所産であるという事実が忘れられるときに生じるのである (Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 52-54)。

以上のように、社会的行為者の自生社会学と対比される科学としての社会学を、小松秀雄は次のように表現している。「フッサールの現象学やシュッツの現象学的社会学とは異なり、バシュラールやブルデューたちのエピステモロジーでは日常生活の認識枠組みと科学の認識枠組みとの異質性が強調されており、多様な認識論的障害を自然なものとして受容する日常知に対する認識論的切断を媒介にしてこそ科学の知は妥当な形に構成される」（小松 1999: 52）。我々はここで、盛山が定式化した意味での構築主義を思い出すことができるだろう。すなわち、日常生活の外部に立つことで客観的たろうとした社会学である。もちろん、盛山が念頭に置いていた構築主義はスペクターとキツセを代表とする社会問題の社会学であり、ブルデューのそれではない。しかし、素朴实在論の否定を前提とし、認識論的切断という形で社会学の科学的客観性を主張するブルデュー社会学は、盛山によって理解された、外的視点に基づく客観主義的戦略としての構築主義と多くを共有しているように思われる。ここでは、ブルデュー社会学を、盛山によって理解されていた構築主義と関連づけておきたい。

2.1.2 構造主義的構築主義

前節では、ブルデュー社会学を赤川と盛山が理解する構築主義の中に位置づけるために、その認識論と社会学者の位置づけを検討した。本節では、ブルデュー社会学の構築主義的側面をより詳細に検討していきたい。

ブルデューはある箇所自身社会学を「構築主義的構造主義」もしくは「構造主義的構築主義」と呼んでいる。この場合の構造主義ないし構造主義的という言葉でブルデューが言わんとするのは、「単に言語、神話等々の象徴体系の中だけでなく、社会的世界それ自体の中に、行為者の意識と意志から独立した客観的構造、行為者の実践なり表象なりを方向づけるなり拘束するなりすることのできる構造がある」（Bourdieu 1987=1991: 194）ということである。他方、構築主義ないし構築主義的という語が意味するのは、「一方では、私がハビトゥスと呼ぶものの構成要素である、知覚、思考、行為の図式、もう一方は、社会的諸構造、とくに私が界ならびに集団と呼ぶもの、さらには、通常社会階級と名づけられているもの、この双方ともが社会的起源を持つものだ、ということ」（Bourdieu 1987=1991: 195）である。コルクユフによれば、ブルデューは、このように社会的現実客観的次元と構築的次元を認めるものの、前者に一定の優位性を与えている（Corcuff 2006: 27）。とはいえ、ここで確認しておきたいのは、ブルデューが自身の社会学に構築主義という名を与えていたという事実である。

以下、その構築主義的側面を明らかにしていきたい。すなわち、ハビトゥスと社会構造の社会的起源が、ブルデュー社会学の枠組みにおいて、どのように理論的かつ経験的に説明されていたのかを見ていきたい。ただし、彼の多岐にわたる仕事の内容のすべてを検討することは、筆者の能力を超える。そこで、本節は、彼の一連の教育社会学の仕事に議論を限定したい。

ブルデューが経験的調査と関連させながらハビトゥスと社会構造の構築性を体系的に論じているのは、『遺産相続者たち』（Bourdieu et Passeron 1964=1997）の6年後に書かれた『再生産』（Bourdieu et Passeron 1970=1991）においてである。前者は、1960年代のフランスにおいて見られた、社会的出自を主な要因とする、高等教育への進学率に関する不平等に取り組んだ仕事として知られている。ここでは、学校文化に適応的な諸性向の家庭内相続が、不平等構造の再生産を規定する要因として主張された⁴⁾。このような不平等構造の記述は、『再生産』において、ハビトゥスや象徴的暴力、文化資本といった概念によって、より洗練されたものとなる。

ブルデューは、一般的に「持続可能で置き換え可能な諸性向のシステム」(Bourdieu 1980: 88)と定義されるハビトゥス⁵⁾を、社会化の形式に応じて類型化している。すなわち、第一次社会化過程で形成された「第一次ハビトゥス」と、それ以降に獲得されるハビトゥスである。最初期の教育は、「一つの集団または階級の特徴をおびた第一次ハビトゥスをうみだし、これが、その後につづく他のハビトゥスの基礎ともなる」(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 66)。つまり、一次的教育で獲得されたハビトゥスは、その後獲得される新しいハビトゥスを条件づける。それゆえ、二次的教育の一つである学校教育が成功するか否かは、これに先立つ最初期教育にかかっている(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 67)。

ハビトゥスの資本としての価値は、この一次的教育に多くを負っている。というのも、文化資本の身体化された形態であるハビトゥス⁶⁾が高い価値を持つかどうかは、家庭内教育によって教え込まれる文化が、社会の中で支配的な位置を占めている文化とどれほど類似しているかによって決まってくるからである⁷⁾。

学校の中で教え込まれる文化とは、まさにこのような支配的な集団あるいは階級のそれである。それゆえ、学生の学校的成功は、一次的教育を施す家族がどの階級に所属しているのかに大きく依存する⁸⁾。このような形で階級構造と対応することで、学校は、支配的文化の再生産だけでなく、階級構造の再生産にも寄与する。

だが、単なる支配的文化の押しつけにすぎない学校教育が首尾よく展開されるためには、その文化が正統なものとして承認されなければならない。この過程を説明する理論的装置が象徴的暴力である⁹⁾。象徴的暴力とは、コルクユフとラファイによれば、マルクスとウェーバーに多くを負っている概念である。具体的には、マルクスからは、社会的現実が、闘争する社会集団間の力関係の集合であるという点が引き継がれ、ウェーバーからは、社会的現実が意味関係の集合であり、象徴的次元をもつという点が引き継がれる。ブルデューは、ウェーバーにならう形で、支配について次のように考える。支配は、武力に排他的かつ継続的に訴えられないのであれば、被支配者が当の支配に賛同するようになるよう、正統なものとして承認されなければならない。同時に、この支配を可能にする機制的な性格が誤認されなければならない。「このような承認と誤認の二重の過程こそが象徴的暴力の本源にあるのであり、象徴的暴力を通じて、社会的世界を構造化する多様な支配が正統化されるのである」(Corcuff et Lafaye 1996: 222)。

ブルデューにとって、教育という働きかけは象徴的暴力の一形態を意味する(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 18)。なぜなら、教育的働きかけとは、恣意的に範囲画定された文化を恣意的な力によって押しつける営みを意味するが、そのような二重の恣意性が、集団間や階級間の力関係によって、自然なものとして誤認されると同時に正統なものとして承認されているからである。支配的文化の押しつけとしての学校教育は、このような形で正統化されていく。

教育を象徴的暴力という点から捉えるとき、我々は、上述のハビトゥスを、次のように再定式化することができる。すなわち、力関係に基礎づけられた教育を通じて生み出される、「文化的恣意の諸原理の内面化の所産」(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 52)である。ハビトゥスは、文化的恣意を生み出す社会的条件としての力関係に適合的な実践を生み出す限りにおいて、「階級間の力関係の構造の再生産として規定される社会的再生産」(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 26)に貢献する。

以上の議論から、ハビトゥスと社会構造の社会的起源を次のように説明することができる。ハビトゥ

スは、教育を通じた文化的恣意の内面化の所産であり、この内面化過程には象徴的暴力が介在している。社会構造は、文化的再生産、すなわち、文化資本の配分構造の再生産を通じた力関係の再生産を、その社会的起源としている。

2.2 批判的側面

ある文化的恣意を正統なものとして押しつけ、その背後にある力関係を覆い隠す象徴的暴力。その一形態である教育的働きかけを通じて生み出される、文化的恣意の内面化の所産としてのハビトゥス。これら二つの概念からブルデュー社会学における支配概念の特徴を考えると、ベローとクールモンによる次の説明はとても説得的であるように思われる。「支配者は自分の価値を被支配者に押しつけ、被支配者はそれを内面化することによって、自分が被っている支配の共犯者となり、支配の永続化に貢献してしまう」(Béraud et Coulmont 2008: 63)。

支配概念がこのように理解されるとき、社会学の分析はある効果をもつものとして理解される。それは、被支配者が知らぬ間にその共犯者となっている支配構造の再生産機制を暴露する効果である。このような暴露を通じて、ブルデュー社会学はある批判を展開していたとすることができる。すなわち、中立性ないし平等性を主張する学校システムが、実はある文化的遺産をもつ子供たちを何も言わずに優遇し、不平等を再生産していることを告発する、能力主義神話の批判である。

リュック・ボルタンスキーは、このように不平等構造とその背後にある力関係を暴露するブルデュー社会学を批判社会学と呼び、その主な狙いを「それと気づかずに服している支配について行為者を啓蒙し、彼らに批判的潜勢力を発達させる諸資源を与えること」(Boltanski 2009: 84)に見出だしている。

そのような批判社会学に対して、ボルタンスキーはいくつかの難点を提示している。その一つが、批判社会学が拠って立つ規範的根拠の不明瞭性である。以下、節を改めてこの点について検討していきたい。というのも、この検討が、本論文の第一の目的、すなわち、構築主義以後の社会学においてなぜ規範性への関心が高まっているのかを理解する手助けとなるからである。

3. ボルタンスキーによるブルデュー社会学の再構成

前節では、ブルデュー社会学の認識論的前提、社会学者の位置づけ、ならびに、構築主義的側面を検討した。この作業を通じて、ブルデュー社会学がある種の批判的契機をもつことも示した。それは、十分に意識されないまま諸個人が服している、支配の機制の暴露である。

本節は、最初に、ボルタンスキーが批判社会学としてのブルデュー社会学をどのように特徴づけていたのかを確認する。ただし、そのすべてに触れるわけではなく、あくまで本論文と関わる内容にのみ言及する。次に、この作業にもとづいて、批判社会学が記述と規範的基礎との関係をあいまいにしていたこと、このことがブルデュー社会学の批判的プロジェクトに大きな影を落とすことを明らかにする。その影とは、解放的潜勢力の衰退である。

3.1 批判社会学の特徴

ボルタンスキーは、ブルデューの批判社会学を特徴づける作業を、その支配概念の検討からスタートさせている。ボルタンスキーは、批判社会学における支配概念を、次の二点から捉えている。一つ目は、あらゆる社会関係を垂直的次元、すなわち、力関係に還元する傾向。もう一つは、支配が行為者に

よってそのようなものとして経験されないという想定である。

ボルタンスキーは、これら二点を可能にする批判社会学の理論的特徴をいくつか挙げている。ここでは次の三点を扱う。

第一の理論的特徴は、暴力概念の物理的なそれから象徴的なそれへの拡張である。象徴的暴力とは、上述のように、力関係を隠蔽し、ある恣意的な意味を正統なものとして押しつける、誤認と承認から成る力であった。物理的暴力が行為者によって暴力として経験され記述される場合が大半であるのに対し、象徴的暴力は暴力として経験されることがほとんどない。したがって、ボルタンスキーも述べるように、「象徴的暴力のような概念は、あらゆる社会関係を暴力の一形態とみなすことを可能にする」(Boltanski 2011a: 6)。

第二の理論的特徴は、行為者の盲目性とそれを可能にする無意識の強調である。あらゆる関係が象徴的暴力を通じて確立された支配関係を伴っているはずなのに、そのようなものとして生きていない人々が存在するのはなぜなのかを説明するために、行為者の思い違いや、それを生み出す無意識や幻想といった概念が強調されるわけである。ボルタンスキーによれば、このことは三つの帰結をもたらす。

一つ目の帰結は、行為者がだまされている存在としてしばしば扱われる点である¹⁰⁾。このとき、行為者の批判的能力は過小評価されるか無視されてしまう。

二つ目の帰結は、行為者の性向的属性を強調し、行為者のあらゆる行動を、とりわけ教育過程を通じて行なわれる支配的規範の内面化で説明しようとする点である。この内面化は、「習慣がそうであるように、これらの規範を身体に刻み込む身体化という形態をとる」(Boltanski 2009: 42)。この身体化が、諸構造の再生産を説明する要因として用いられる。

三つ目の帰結は、行為者と社会学者との過度の非対称性の強調である¹¹⁾。つまり、一方で、思い違いをしている行為者と、他方で、「その行為者が置かれている社会的条件の真理を暴露することができる」(Boltanski 2009: 43) 明晰な社会学者との非対称性である。このことは批判社会学を二つの方向へと導く。一つ目の方向性は、科学としての社会学の過大評価である。社会学者は自身の明晰性を根拠づけるために、社会学の科学としての性格を強調するようになる。この場合、科学は、「社会学者が人びとよりも彼らについて多くを知っているという要求を支えることができる唯一の基礎」(Boltanski 2009: 43) として機能する。もう一つの方向性は、社会生活における再帰性の諸効果の過小評価である。科学としての社会的知と日常知との違いを強調することで、批判社会学は、社会の中で社会的言説が循環する過程や、行為者がそれらの言説に由来する説明枠組みを獲得し、活用することが及ばず諸効果をないがしろにする傾向がある。

第三の理論的特徴は、不確実性が過小評価されている点である。というのも、構造と性向との循環関係や構造の再生産が強調されることで、行為者が社会生活の中で直面する不確実性が吸収されてしまうからである (Boltanski 2011b: 15-16)。このことは、二つの困難を導く。一つ目は、批判や正当化が開示される論争を説明することが難しくなる点。もう一つは、社会変動や、その過程において批判が果たす役割を説明することが難しくなる点である。

3.2 規範性の問題

以上のように批判社会学を特徴づける過程で、ボルタンスキーは批判社会学に対していくつかの問題を提起する。その一つが、力関係の暴露を行なう記述と、批判の依拠する規範の支点との関係がいま

いな点である。「この社会学は、不正義として記述される不平等を暴露するものの、不正義を不正義として定義することを可能にする正義の位置を明確化しない」(Boltanski 1990b: 129-130)。

批判社会学が自身の依拠する規範を明確化しようとししない原因を、ボルタンスキーは、科学的客観性の強調に求めている (Boltanski 2009: 45)。批判社会学が暴露を可能にする拠点として自身の科学性を強調することはすでに述べたが、ボルタンスキーによれば、このような姿勢は、事実判断と価値判断との区別を強固にし、自身の拠って立つ暗黙の価値階梯を明確化する作業を遠ざけることにつながった。批判社会学は、このとき、価値から後退した位置を守りながら同時に批判の正統性を守るために、科学が暴露する現実を、社会が自分自身について語る言説や社会が表明した理想に対立させるだけで作業を終えてしまい、正義についての態度決定を行なおうとしないのである (Boltanski 1990b: 130)。

だが、なぜ規範的根拠の不明瞭性が批判社会学にとって問題となるのか。ボルタンスキーの議論にしたがえば、それは、力関係の暴露だけでは、批判の主たる目的である解放を達成することができないからである。

批判社会学が行なう記述は、力関係や支配の社会的審級を暴露するものの、その結果として、暴力を社会生活の中心に置くことになる。確かに、このように社会が暴力や支配という観点から表象されることで、我々は、「批判から逃れるものは何もありえないしあってはならない(『神聖なものは存在しない』)ことを示すことによって」(Boltanski 1990b: 128)、批判を活発化させることができる。だが、他方で、暴力や支配を生み出すことが社会の本質であるならば、「ある支配の形態が行使されている社会秩序が打倒されても、そのあとに続くのは必然的に、支配の形態は異なるものの少しも減じていない別の社会秩序の形成」(Boltanski 2009: 34)である。つまり、支配とそうではない状態とを区別することを可能にする規範的支点を明確化せず、あらゆる社会関係を暴力や支配に帰着させるおそれのある批判社会学は、たとえ支配的機制を暴露することに成功しても、ある形態の支配を別の形態の支配に置き換えるだけで、一向に支配からの解放をもたらさない可能性がある。さらに、力関係の強調は、あらゆる価値を力関係の産物として問題化することを可能にするため、批判が内包する解放の要求を支える積極的な価値も、問題化の対象になりかねない。つまり、社会の中心に力関係を置くような記述の様式は、一方で、支配的機制の暴露という形で批判的態度を形成するものの、他方で、「批判を相対化へと引き寄せることによって、すなわち、(.....)批判が自分自身に跳ね返ってくる可能性を強調することによって」(Boltanski 1990b: 128)、批判を無効化してしまうのである¹²⁾。

以上のような批判社会学における規範と解放の問題から、次のような仮説を提出することができる。構築主義以後の社会学を規範性的の問題へと導いたのは、力関係の強調による解放的潜勢力の衰退である¹³⁾。

4. 批判の社会学から総合へ

前節は、ボルタンスキーによるブルデュー社会学の特徴づけを検討した。この作業は、批判社会学の次のような問題点を明らかにした。一つ目は、社会生活の中心に力関係を据える記述と、力関係の暴露を通じた批判の依拠する規範的支点との関係があいまいにされていたこと。もう一つは、この不明瞭性によって、解放の道筋を提示することが困難になっていることである。

本節では、まず、ボルタンスキーが批判社会学に抗する形でどのような社会学を構想したのかを確認する。次に、「批判の社会学」と呼ばれるこの社会学が、批判社会学と比べて批判的潜勢力に劣ること、それゆえ、ボルタンスキーは批判社会学と批判の社会学とを総合する方向に進んだことが明らかにされ

る。この作業を通じて、批判的潜勢力の欠如が、構築主義以後規範性を主題化しようとする社会学の陥穽になるかもしれないことが示唆される。

4.1 批判の社会学

批判の社会学の内容を体系的かつ網羅的に述べることは本論文の目的ではない。ここでは、本論文の関心にしたがって、次の三つの観点からこの社会学を特徴づけたい。

第一の特徴は、社会関係のより水平的な次元への視点の転換である。すべての社会関係が単に力関係によってのみ支配されているわけではないという前提から、ボルタンスキーは、社会関係が暴力や利害へと還元されることによって見落とされる側面に分析を向ける¹⁴⁾。その一つが、正統な合意を目指して批判¹⁵⁾や正当化が行われる状況としての論争である。

この場合の「正統な (légitime)」合意とは、「ある原理に依拠して正当化された (justifié) 合意であり、その原理は、あらゆる一般性において有効であることを要求するがゆえに状況を越え出ている」(Boltanski 1990a: 75)。ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』を引き合いに出しながら、ボルタンスキーは、「正当化 (justification) は、一つの普遍性要求を備えている」(Boltanski 1990a: 75) ことを主張する。したがって、批判の社会学で用いられる正統性概念は、批判社会学において用いられるそれ、すなわち、「支配関係のアポステリオリな正統化 (légitimation)」(Corcuff et Lafaye 1996: 217) という意味での正統性とは異なる¹⁶⁾。ボルタンスキーにとって、批判、正当化、ないし、それらが依拠する正統性の諸原理とは、「人間たちがたえず暴力のなかにあることのないよう発明したもの」(Boltanski 2011a: 79) であり、批判の社会学はこれらを記述の対象とする。

第二の特徴は、科学の光によって啓蒙された社会学者と、幻想に浸っている調査対象者との非対称性の棄却である (Boltanski 2009: 46)。前述のように、批判の社会学は、論争という不確実な状況の中で行為者がどのようにして紐帯を作り出したりほどいたりするのかを記述し、モデル化することを試みる。ボルタンスキーによれば、このような行為者の批判的能力にアプローチする際の立場として、次の二つが採用された。

一つ目の立場は、言語哲学の枠組みにおける「善意解釈の原理 (principe de charité)」(Boltanski 2006: 11) から成る。道田泰司によれば、この原理は、人の発言を理解しようとするときには、その人の言っていること、考えていることは、基本的に正しいとせよという原理、もしくは、未知の言語の翻訳に際しては、相手の言い分ができるだけつじつまが合うように、また相手に不合理な主張を押しつけないように解釈すべきであるという原理を指す (道田 2002: 162)。「この立場は、行為者の要求、とりわけ、規範的要求を真面目に考慮することから成る。非正統で隠れた基底的諸利害の隠れた表現しか規範性の中に見ない傾向に抗して、我々はこの概念 (.....) や (.....) 道徳に再び重みを与えようとした」¹⁷⁾ (Boltanski 2006: 11-12)。

二つ目の立場は、この一つ目の立場から派生するものであり、社会学を「二次的科学」(Boltanski 2006: 12) として理解することから成る。この点についてもボルタンスキーは言語学を拠り所にしていく。ボルタンスキーは、社会的世界で行為するために必要な知識をもつ普通の人々と社会学者との関係と、言語の知識をもつ人々と言語学者との関係を、次のような形で比較する。「言語の知識を有する者、それは語る者であり、言語学者ではなく話し手です。しかし話し手は自分が話すためにどうしているかを知りませんし、自分が用いる言語に合致した文章を作るといことがいかにして生じうるかを知りま

せん。それを知ることは、彼の仕事ではないのです。言語学は彼の能力のモデルを構築しようと試みません。同様のやり方で、社会学者の仕事は、まず行為者の社会的能力のモデルを確立すること、これらのモデルを経験の所与に照らして修正すること、新たな範疇がいかんして出現あるいは消滅するかを理解しようとする、等々にあります」(Boltanski 2011a: 51)。

このように、批判の社会学は、批判社会学とは異なり、搾取や支配、権力といった問題よりも、社会的紐帯、道徳、正義といった規範的次元に分析の強調点を置く。だからといって、批判の社会学に社会批判が不可能であったわけではない。批判の社会学の第三の特徴は、行為者の観点を利用することによって、社会批判に貢献する点である。すなわち、「行為者の道徳感覚、とりわけ、行為者の正義の日常感覚に依拠して、現実の社会的世界と、人びとの道徳的期待を満たすためにはそうでなければならない社会的世界との間のズレを明らかにすることにある」(Boltanski 2009: 56)。このように行為者の視点を採用することで、批判の社会学は、研究者の個人的な観点を導入することなく、また、実体論的な道徳哲学を引き受けることなく、世界に対して規範的なまざしを向けることが可能となる(Boltanski 2009: 56)。

4.2 批判社会学と批判の社会学の総合へ

ところが、ボルタンスキーは、1999年に出版された『資本主義の新しい精神』において、批判社会学と批判の社会学の総合へと向かう。その要因のすべてをここで挙げることはできないが、本論文の関心にしたがうと、次の二点を指摘できる。

一点目は、力関係が分析の射程から遠ざけられていたことに由来する。つまり、分析の力点が、行為者によって行なわれる合意を目指す論争に置かれることで、「社会的行為の正当化しえない側面や、力の、さらには暴力の関係を無視ないし過小評価している」(Boltanski 2011a: 112)と批判されたのである。このような批判を受けて、ボルタンスキーは、『資本主義の新しい精神』において、「力および力関係という観点からの記述と、道徳的、法的関係という観点からの記述が、いかんして同じひとつの動態モデルのうちに統合されるか」(Boltanski 2011a: 114)を示すことによって、批判の社会学により多くの批判的契機を与える努力がなされた。

だが、もちろん、前述のように、批判の社会学は社会批判の方法論をもっていなかったわけではない。つまり、正義に関する日常的な感覚に基づいて行為者が定式化した批判に直接依拠することによって、批判の社会学は社会批判に貢献しようとした。だが、ボルタンスキーによれば、この種のアプローチは、「社会的現実の一般的諸次元を問題にすることができるような、より大きな批判への道を切り開かない」(Boltanski 2011b: 21)。というのも、「少なくとも日常的な状況においては、すなわち、反乱的もしくは革命的と形容することのできるような期間以外では、社会的行為者が定式化し、社会学者が収集する批判は、比較的限定された規模しか持たず、ローカルな環境に関わるものであるから」(Boltanski 2011b: 21)である。現実を定義する一般的枠組みを問題化することのこのような困難性が、ボルタンスキーに、批判社会学と批判の社会学との両立可能性の検討に向かわせた¹⁸⁾。

以上の考察を、本論文の問題関心と関連づけることで、この節を終えよう。批判の社会学は、批判社会学を特徴づける次の二点を問題化する過程で、自らの土台を築こうとした。一つ目は、社会関係を力関係や利害関係に還元する点、もう一つは、社会学者と行為者との過度の非対称性である。批判社会学が分析の俎上に載せられなかった論争という状況、その中で展開される行為者の批判的能力を扱うこと

で、批判の社会学は、「論争の最中における批判と正当化の分析枠組みを構築しようとした」(Boltanski 2011a: 11)。ここで必要とされたのは、行為者の規範的要求にできるだけ寄り添うような姿勢であった。しかし、力関係が比較的均衡している状況に分析を限定することによって、批判の社会学は、暴力の次元が捨象されているという非難を受けた。

また、批判の社会学は、批判社会学においてないがしろにされていた行為者の規範的要求を真摯に受け取ることによって、記述と批判の新たな関係を樹立することに取り組んだ。この企ては、批判社会学においては不明瞭だった規範的支点を明らかにすることに成功したものの、その代償として、現実を定義する一般的枠組みの次元にまで批判を展開することができなくなってしまった。

批判の社会学が直面した以上の批判的潜勢力に関する問題は、我々に次のことを教えてくれる。それは、構築主義が保持していた批判的潜勢力を維持しながら、同時に社会学に規範性を回復することの困難性である。

5. おわりに

本論文は、素朴实在論の否定という比較的緩やかな定義から構築主義を捉えることで、赤川と盛山が理解する構築主義と、ブルデューの構造主義的構築主義を共通の土台に載せた。次に、ボルタンスキーのブルデュー社会学からの距離化を検討することによって、構築主義以後の社会学における規範性への関心の高まりという傾向は、日本においてもフランスにおいても確認されることを主張した。フランスの事例に則して言えば、このような傾向を生じさせた背景には、力関係の暴露を行なう記述と、批判の依拠する規範的支点との関係の不明瞭性による、解放的潜勢力の衰退があった。つまり、ブルデューの批判社会学は、支配とそうではない状態を区別することを可能にする規範的支点を明確化しないため、あらゆる社会関係を支配や暴力といった点に還元する傾向をもつ。その結果、一方で、支配的機軸の暴露という形での批判的態度は形成されるものの、他方で、支配から解放された社会の状態を導くことが困難となるだけでなく、解放の要求を方向づける積極的な価値さえも力関係の産物として相対化されるおそれがある。本論文では、このような解放的潜勢力の衰退を、構築主義以後の社会学を規範性の主題化へと向かわせた一要因と考えておきたい。

本論文のもう一つの目的、すなわち、構築主義以後の社会学における規範性への関心の高まりという傾向に対して今後の研究の方向性を提示することについては、赤川と盛山が提示した方向性と次のような形で差異化することによって達成したい。

批判の社会学を構想した時期のボルタンスキーと赤川との関係は、次のようにまとめることができる。同じように社会学者と調査対象者との過度の非対称性を問題化し、調査対象者にできるだけ寄り添う研究方針を提示しながらも、ボルタンスキーは、赤川と異なり、構築主義に規範性を回復する道を選ぶ。なぜなら、規範性が回復されない限り、構築主義の展開する社会批判は、解放的潜勢力の欠如という形で無効化してしまうおそれがあったからである。ボルタンスキーは、行為者が自身の日常的な正義感覚に基づいて展開する批判の記述を通して、記述と批判との新たな関係を確立しようとした。しかし、このような批判の社会学の企ては、上述のように、力関係の度外視と批判の射程の狭さという二点から頓挫する。

批判の社会学のこのような失敗が、盛山の企てに示唆するものはなんだろうか。盛山も、外的視点の採用という形で社会学者の外在性を主張する構築主義を否定する。盛山によれば、日常的世界の外部に

立つことなどそもそも不可能であり、また、外的視点に立とうとすることで生み出される相対主義や懷疑主義、シニシズムは警戒されるべきものだった。構築主義に対するこのような否定的な見解が、盛山を、共同性を規範的に探究する社会学へと向かわせた。ただし、彼は、共同性の探究が、現状の共同性に対して無批判的になる危険を認識していた。この点を批判の社会学の失敗と関連づけると、次のように表現できる。すなわち、盛山は、力関係の軽視とそれに付随する批判的潜勢力の欠如という問題を、いわば見越していたのである。

だが、批判の社会学のもう一つの失敗、すなわち、現実を定義する一般的枠組みにまで批判を展開する可能性についてはどうだろうか。批判の社会学は、行為者が展開する批判に直接依拠することによって社会批判に貢献することを試みた。だが、「普通の人々は、少なくとも社会生活が普段通りに営まれている場合は、憤りや抵抗を引き起こす状況に刻み込まれている一般的枠組みを問題にすることは滅多にない」(Boltanski 2011b: 22)。それゆえに、批判の社会学は、社会的現実の一般的次元にまで批判を展開することができなかった。反対に、批判社会学は、科学という名の外在的位置に依拠することによって、行為者の現実を規定する一般的枠組みを問題化することに成功していた。

ここで示唆されているのは、社会的現実をその全体性から記述することを可能にする、外在的位置のもつ批判的意義である。ボルタンスキーによれば、批判社会学は現実を相対化する可能性を切り開いている。なぜなら、社会秩序をその全体性から記述することは、その社会秩序を他のありうる秩序と比較対照することができる位置が存在するかのようふりをすることを前提とするからである (Boltanski 2009: 77)。そして、相対化は批判の最初の一步であるという (Boltanski 2009: 77)。というのも、相対化とは現実から距離をとることであり、この外在的位置によって、現実から必然性が部分的に取り除かれ、まるで程度恣意的なものであるかのように現実を扱うことができるようになるからである (Boltanski 2009: 72-73)。反対に、社会学者と行為者との過度の非対称性を問題化した批判の社会学は、行為者にも観察者にも同時に現れているものとしての現実から出発しようとするので、現実を閉ざす効果を自らに生み出してしまう傾向がある (Boltanski 2009: 77)。この違いが、批判社会学の方が批判的潜勢力をもつことができた理由の一つであるとボルタンスキーは述べる。

この点は、外的視点に否定的な地位しか与えていなかった盛山が見落としていたものであるように思える。前述のように、外的視点の採用とは、盛山にとって、社会学が科学的客観性を確立するための戦略だった。「客観的に見るとはむしろ世間の見方から距離をとることであり、世間の見方そのものを『対象化』してみることでなければならない。ベッカーのレイベリング論は、こうした社会学的スタンスの始まりを告げるものであった」(盛山 2011: 7)。だが、ボルタンスキーによれば、世間の見方から距離をとり、世間の見方をその全体から対象化することは、既存の世間の見方が自然なものではなく、別様でもありうることを示す効果をもつ。このような相対化こそが、批判社会学や構築主義に批判的潜勢力を与えていたと考えることができる。

ただし、相対化だけでは、盛山が警戒していたようなシニシズム、ボルタンスキーが問題化した解放的潜勢力の衰退を惹起する。したがって、本論文が提示する今後の研究の方向性は、盛山のように構築主義を全面的に捨てる方途でもなければ、赤川のように規範的なものを斥ける方途でもなく、ボルタンスキーが行なったような、批判社会学と批判の社会学との、構築主義と規範社会学との総合を目指す道である。

注

- 1) 盛山は、構築主義の登場を用意した潮流として、ラベリング論の他にもいくつか言及している。社会学内部ではバーガー＝ルックマンの議論、より広い文脈では1968年以降のポストモダンの思潮である。これらに通底するのは、「知識の客観性への根本的懐疑」(盛山 2011: 201)と、それに付随する「自らに潜む自文化中心主義性をいかにして脱却するかという潔癖性的自己懐疑」(盛山 2012: 20)であると盛山は述べている。
- 2) 以下、ブルデューにのみ言及していくが、共著者であるパスロンやシャンボルドンの貢献を否定するものではない。
- 3) 同時に、ブルデューは、フランクフルト学派に象徴される、「経験的な研究を行うことなく、実証主義の危険性をあらゆる点で告発する」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 465)理論主義も否定している。理論主義や実証主義に抗してブルデューが目指すのは、「理論的に基礎づけられた経験社会学」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 465)である。
- 4) 宮島喬によれば、ここでは二つの戦略が採用されていた。一つ目は、再生産論としての教育論である。すなわち、教育を、社会移動や階級・階層変動を媒介するものとして捉えるのではなく、既存の社会構造を維持・強化するものとして捉える視点である(宮島 1994: 50)。もう一つは、文化の果たす役割の強調である。すなわち、「再生産を促進する過程のなかに直接に経済的障害を要因として挿入するのではなく、ある種の文化的な態度および能力を重要な媒介的要因として入れてくる点」(宮島 1994: 51)である。このような戦略に依拠することで、ブルデューは、生まれつきの才能をもつ学生という考え、それから、民衆階級出身の若者が最も成功していない事実を経済的障害で説明できるという考えを問題化するのに成功した。
- 5) コルクユフはこのハビトゥスの定義に詳細な注釈を加えている。それによれば、性向とは、「一定のやり方で知覚し、感覚し、行動し、思考する傾向であり、それぞれの個人が、生存の客観的条件や社会的軌跡によって、しばしば意識せずに身体化し内面化するものである」(Corcuff 2006: 29)。持続可能が意味するのは、「たとえこれらの性向がさまざまな経験の中で修正されることがあるとしても、我々の中に強く根を下ろしており、それゆえ、変化に抵抗する傾向をもち、人生に一定の連続性を印づける」(Corcuff 2006: 29)ことである。置き換え可能とは、「いくつかの経験(たとえば家族での経験)の中で獲得された諸性向は、別の経験の領域(たとえば職業)に対して効果をもつ」(Corcuff 2006: 29)ことを意味する。最後に、システムという言葉で、「これらの諸性向は統合され、一つのシステムを形成する傾向がある」(Corcuff 2006: 29)ことが意味されている。
- 6) ブルデューは文化資本を、身体化された様態、客体化された様態、制度化された様態の三つに分類している。身体化された様態としての文化資本とハビトゥスとの関係を、ブルデューは次のように述べている。「文化資本とは、生き物になった財産、まさに身体化され『その人物』に完全に組み込まれた所有としての特性、すなわちハビトゥスである」(Bourdieu 1979=1986: 21)。
- 7) このことは、より具体的には、次のように表現されている。文化資本とは、「種々の家族的AP(=教育的働きかけ)によって伝達されてくるもろもろの財のことで、文化資本としてのその価値は、支配的APの押しつける文化的恣意と、それぞれの集団または階級のなかで家族的APを通して教えこまれる文化的恣意との距離によって決まってくる」(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 51)。
- 8) その具体例として、ブルデューは言語能力を挙げている。「教育的コミュニケーションの伝達効率はずねに受信者の言語能力(大学言語のコードの完全な巧みな習得の良し悪しで規定される)によって左右されるから、学校的な利益の大きい言語資本の異なる諸社会階級への不平等配分が、社会的出自と学校成績の関係(調査でつかむことができる)をうちたてるもっとも眼にみえにくい媒体の一つをなすことになる。(.....)各個人に与えられている言語資本が学校市場でどれだけ価値をもつかは、学校から要求される象徴的習得と、階級の一次的教育にその個人が負っている言語の実際の習得との間の距離にしたがって決まるのである」(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 146-147)。
- 9) 『再生産』においては次のように定義されている。「およそ象徴的暴力を行使する力、すなわちさまざまな意味を押しつけ、しかも自らの力の根底にある力関係をおおい隠すことで、それらの意味を正統であるとして押しつける力は、そうした力関係のうえに、それ固有の力、すなわち固有に象徴的な力をつけくわえる」(Bourdieu et Passeron 1970=1991: 16)。
- 10) ボルトンスキーはこのような行為者像を、ハロルド・ガーフィンケルの「文化的判断力喪失者(cultural dope)」

という言葉で表現している (Boltanski 2009: 42)。

- 11) 無意識の強調と社会学者と行為者との非対称性の強調との関連性は、ブルデュー社会学の認識論を検討する中で我々も言及したものであるが、ボルタンスキーも別の箇所『社会学者のメチエ』の次の箇所を引用している (Boltanski 1990b: 129)。「自生社会学がこれらの予先観念を生み出してきた前提を無意識のうちに受け入れ」(Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 48)。
- 12) 批判的態度を形成しながらも規範的根拠があいまいであるために解放的潜勢力に欠けるという指摘は、アクセル・ホネットがミシェル・フーコー『監獄の誕生』の検討を通して提示した「系譜学的批判」を思い出させる。ホネットによれば、系譜学的批判とは、「その理念や規範を守ることがどれだけ規律＝訓練のもしくは抑圧的実践に資することになっているのかを歴史的に論証することによって、社会秩序を批判する試み」(Honneth 2009: 48)を意味する。一方で、ホネットは、系譜学的批判が、批判の依拠する規範的根拠がまだその妥当性を保持できているかを検証するのに有効であることを認める。だが、他方で彼は、系譜学的批判には追加のステップが必要であると説く。というのも、系譜学的批判は、なぜ社会的規律＝訓練や政治的抑圧が道徳的悪を表象しているのかを、自分自身で規範的に正当化することができないからである。自分自身が与えようとしない規範的正当化を前提とすることで生存しているという意味で、系譜学的批判は「寄生的批判の手続き」(Honneth 2009: 48)であるとホネットは述べる。本論文との関連で言えば、次のように言い換えることができる。系譜学的批判は、何かしらの規範性に寄生しない限り、あらゆる社会関係を規律＝訓練の権力関係に還元してしまうおそれがある。このとき、系譜学的批判は、批判社会学と同様に、何の解放ももたらさなくなってしまう。
- 13) 批判社会学における解放的潜勢力の衰退という問題については、もう一点指摘することができる。これは、記述と規範的支点との関係の不明瞭性というよりむしろ、批判社会学の決定論的性格に由来する問題である。その問題とは、批判社会学が行為者の解放過程を説明できないという点である。ボルタンスキーによれば、「力や力関係という観点から行なわれる記述は、それが十分に展開されるためには、実証主義的方向づけをもつ科学から借りてきた、因果的決定の言語に助けを求めなければならない」(Boltanski 2009: 34)。ボルタンスキーの言う実証主義的な社会学とは、「個人や集団の行動を説明しうる隠れた『法則』と『構造』を特定することだけを目指す」(Boltanski 2011a: 97)社会学を意味する。つまり、諸個人に意識されない力関係の暴露を目指す記述は、この関係の規定性を強調するようになる。そして、この規定性こそが、諸個人の支配的審級への服従過程を説明するわけである。だが、このような形で支配の容赦ない性格が強調されればされるほど、批判社会学は、「服従化の度合いの不均衡さを識別することが困難になり、行為者がどのようにして解放への道を切り開くことができるのかを理解することが困難になる」(Boltanski 2009: 79)。ボルタンスキーは、批判社会学の中に見られる解放の要求と「法則」としての力関係の規定性との間の緊張を、別の箇所で次のように表現している。「解放を提唱する立場 (.....) と、歴史的必然性を築き上げる科学主義的な立場とのあいだに、極めて強い緊張があるのです。ブルデューには、不正に対する極めて強い憤慨があり、解放という狙いがあり、そして必然性の秩序、社会の法に対する非常な固執があるのです。このことは、一貫性の欠如をもたらします。なぜなら、もしも社会が法によって支配されるのであれば、たとえばあらゆる社会的世界が支配の対象であるなら、支配に対して憤慨するには及ばないからです。仮に、人々が口にする規範形成の動機がすべてイデオロギーや虚偽の秩序に属するほど強力な社会の法が存在したら、そのとき、いかにして解放を目指しうるのがわからなくなります」(Boltanski 2011a: 75)。
- 14) ボルタンスキーは、論争や諍いといった状況の他に、愛についても分析している。批判社会学が提示する支配概念に基づけば、愛に関する記述は次のような侮辱的な様相を呈するかもしれない。「パートナーに対して抱いている彼の情熱は、『実際は』、彼女が彼に対して行使している社会的支配の効果の結果でしかない、というのも、彼女は彼よりも上位の階級の出身であるから」(Boltanski 2009: 42)。これに対して、ボルタンスキーは、愛を、対抗贈与なき贈与という観点から再定式化することを試みている (Boltanski 1990a)。
- 15) この場合の批判とは、行為者が暴力に訴えることなく不都合を表明しようとするさいに実行される操作と見なされる (Boltanski et Thévenot 1991=2007: 30)。
- 16) コルキュフとラファイは、正統性概念の使われ方の違いに、批判社会学と批判の社会学の対立を見出だしている。彼らは、批判社会学と批判との関係の難点を、次のような形で表現している。これは、本論文が批判社会学と規範性との問題を論じたのと同じやり方である。「もし、支配としてしか結びつかない正統性しか存在しないのならば、何が支配の批判の正統性を保証するのか」(Corcuff et Lafaye 1996: 226)。

- 17) 行為者の発する要求を分析において重んじる姿勢は、ブルデューの非意識の原理と対照的である。「非意識の原理にしたがうなら、個人がそこに組み込まれている客観的諸関係、人々が表明した意図のなかよりも、集団の構造あるいは形態のなかにより正確に表れてくるような客観的諸関係のシステムを構築しなければならない。個人的な態度、意見、野心（アスピレーション）を記述しても、ある組織がどのように動くのかを説明する原理は得られないし、反対にその組織の客観的原理を把握すれば、さまざまな態度、意見、野心を説明できる原理にも同時に到達することができる」（Bourdieu, Chamboredon et Passeron 1973=1994: 53）。
- 18) どのような形で両立可能性が構想されたのかについては別稿に譲りたい。

参考文献

- 赤川学, 2012, 『社会問題の社会学（現代社会学ライブラリー 9）』弘文堂。
- Béraud, Céline et Coulmont, Baptiste, 2008, *Les courants contemporains de la sociologie*, Paris: Presses Universitaires de France.
- Boltanski, Luc, 1990a, *L'Amour et la justice comme compétences: Trois essais de sociologie de l'action*, Paris: Métailié.
- , 1990b, “Sociologie critique et sociologie de la critique,” *Politix*, 3(10): 124–134.
- , 2006, “Préface”, Mohamed Nachi, *Introduction à la sociologie pragmatique*, Paris: Coursus, 9–16.
- , 2009, *De la critique: Précis de sociologie de l'émancipation*, Paris: Gallimard.
- , 2011a, 『偉大さのエコノミーと愛』文化科学高等研究院出版局。
- , 2011b, “La contribution de la sociologie à la critique sociale”, *Divinatio*, 33.
- Boltanski, Luc et Thévenot, Laurent, 1991, *De la justification: Les économies de la grandeur*, Paris: Gallimard. (= 2007, 三浦直希訳『正当化の理論——偉大さのエコノミー』新曜社。)
- Bourdieu, Pierre, 1979, “Les trois états du capital culturel”, *Actes de la recherche en sciences sociales*, 30: 3–6. (= 1986, 福井憲彦訳「文化資本の三つの姿」福井憲彦・山本哲士編『アクトNo. 1』日本エディタースクール出版部, 18–28.)
- , 1980, *Le Sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit.
- , 1987, *Choses dites*, Paris: Éditions de Minuit. (= 1991, 石崎晴己訳『構造と実践——ブルデュー自身によるブルデュー』藤原書店。)
- Bourdieu, Pierre et Passeron, Jean-Claude, 1964, *Les Héritiers: Les Étudiants et la culture*, Paris: Éditions de Minuit. (= 1997, 戸田清訳『遺産相続者たち——学生と文化』藤原書店。)
- , 1970, *La Reproduction: Éléments d'une théorie du système d'enseignement*, Paris: Éditions de Minuit. (= 1991, 宮島喬訳『再生産〔教育・社会・文化〕』藤原書店。)
- Bourdieu, Pierre, Chamboredon, Jean-Claude et Passeron, Jean-Claude, 1973, *Le Métier de sociologue: Préalables épistémologiques (deuxième édition)*, Paris: École Pratique des Hautes Études (VI^e Section) and Mouton & Co. (= 1994, 田原音和・水島和則訳『社会学者のメチエ——認識論上の前提条件』藤原書店。)
- Corcuff, Philippe, 2006, *Les nouvelles sociologies: Entre le collectif et l'individuel*, Paris: Armand Colin.
- Corcuff, Philippe et Lafaye, Claudette, 1996, “Légitimité et théorie critique: Un autre usage du modèle de la justification publique”, *Mana*, 2: 217–233.
- Honneth, Axel, 2009, *Pathologies of reason: On the legacy of critical theory*, Main: Columbia University Press.
- 小松秀雄, 1999, 「ブルデューの認識論と実践論の再考: 技能・実践共同体・組織をキーワードにして」『神戸女学院大学論集』46(2): 39–65.
- 道田泰司, 2002, 「批判的思考における soft heart の重要性」『琉球大学教育学部紀要』60: 161–170.
- 宮島喬, 1994, 『文化的再生産の社会学』藤原書店。
- 盛山和夫, 2011, 『社会学とは何か』ミネルヴァ書房。
- , 2012, 「1 公共社会学とは何か」盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編『公共社会学1: リスク・市民社会・公共性』東京大学出版局, 11–30